

## 意志・推量の助動詞と助詞モの共起

——上代・中古における用例整理——

小池 俊希

### 一 はじめに

本稿は、助詞モと共起する意志・推量の助動詞を整理することにより、助詞モの機能の変遷を明らかにしようとするものである。助詞モのいわゆる「結び」に意志・推量の助動詞が現れることはすでに先学の指摘がある<sup>(1)</sup>。

- (一) a 高麗錦紐解き交はし天人の妻問ふ夕ぞ我も偲はむ  
 「吾裳將偲」 (万葉・二〇九〇)
- b ……今だにも 国に罷りて 父母も 妻をも見む  
 と「父妣毛 妻矣毛將見跡」 思ひつつ 行きけむ  
 君は…… (万葉・一八〇〇)
- c 一瀬には千度障らひ行く水の後にも逢はむ「後毛將相」今にあらずとも (万葉・六九九)

(一 a) は七夕の歌である。したがって、言語化された「私があなを思う」という事態に付随して、「彦星が織女星を思う」という事態が暗示される。また、そのような〈含蓄〉が明示されると、(一 b) のように〈並列〉されることとなる。以上のような理解は、現代日本語の感覚にも反さないものであろう。松下(一九二八)は、そのような助詞モの「事情の類する他物と相合せて之を提示する」(六〇〇頁)機能を「合説(題目態)」と称したが、本稿もそれに倣う。

しかしながら、上代語の「……モ……ム」という文型に注目した時、右のように単純な〈並列〉・〈含蓄〉で理解できる用例は存外に少ない。たとえば、(一 c) の「後にも逢はむ」は、一見すると「今も後も逢おう」と解したくなるが、直後の「今にあらずとも」から明らかのように、「今も後も」とい

う解釈は成り立たない。諸注釈では単に「後にでも」と訳されることも多いが、「このモはダニに近く、並立のそれでない。せめて後にでも、の気持」(『全注』(四)・三三三頁)との説明が詳しい。このように、最小限望ましい事態を提示することとで、それよりも望ましい事態を含蓄する用法を、本稿では「最小限度」と称する。つぎに示す(二)のごとく、上代の助詞モはしばしば「最小限度にはたらくため、(一c)の「モ」をそのように解しても『万葉集』を解釈する上で問題はない。

(二) 家に行きて何を語らむあしひきの山ほととぎす一声も

鳴け「二首毛奈家」

(万葉・四二〇三)

(二)の「一声も鳴け」は、相対的に望ましきの大い「何度も鳴く」という事態を排していない。つまり、一項を明示して他項を暗示するという点で概括すれば、「最小限度」も「合説」の機能から説明し得る用法ではある。ただし、上代から現代に至るまでに、意志・推量の助動詞と共起する助詞モは「最小限度」ではなく、「含蓄」を表すように傾いてゆくはずであり、その過程は詳らかでない。

そこで、本稿では、上代から中古にかけての時期を対象として、助詞モの意味機能の変化の一端を捉えてゆきたい。具体的には、従来、「意志・推量の助動詞」という大まかな分類で捉えられていた助詞モの共起先について、主観性の強弱か

ら共起の様相を整理することで、助詞モの意味機能について考えてゆく。

## 二 従来の議論

古代日本語における助詞モと意志・推量の助動詞との共起関係は、従来それほど注目されてこなかったが、助詞モの用法を整理する際にしばしばこれが一類型として指摘された。

古代語の助詞モの主要な整理として、北原(旧姓・工藤)氏の一連の論考をまず取り上げ、見解の近い大野(一九九三)も参照する。つづいて、上代語の助詞モを整理した吉田(一九九〇)、および森野(一九九七・一九九八)を概観する。

まず、工藤(一九六三)は、「モ」が係助詞であるという前提から、いわゆる「係り先」によって『万葉集』の用例を整理する。そして、「推量の助動詞『む』などと呼応する」(九八頁)という分類を設定し、「ム」と共起する助詞モの機能に関しては「モと推量のムと呼応した場合、多く、確固と定め得ない長い行末に関係して、色濃く否定を内に持っている。すなわちモは未来に対する確信の欠乏を表明している。もし、かしたら」という期待、不安がつきまとい、譲歩してしかも捨てきれないで執着する気配がある」(二〇一頁、圏点は原著者による)と述べる。

つづく北原(一九七〇・一九七二)ではそれぞれ対象資料

を『源氏物語』（夕顔・若紫）と『土佐日記』に移すが、推量と呼応する助詞モに関する見解は右と同様である。さらに、北原（一九八一・一九八二）では、『万葉集』の巻一から巻四に資料を限定して、過去・完了、否定、意志・推量を表す助動詞と係助詞の関係について詳述する。そして、一連の論考を貫ぬく「不確実の陳述にかかわる」（北原（一九八二）…五七頁）という助詞モの理解によって、「ム」・「ラム」・「ケム」など、個別の助動詞と係助詞の共起について記述される。また、『も』が推量にかかっている場合、不確かな未来推量をあらわし、意志にかかる場合には、勧誘や願望を表すことが多いように思われる」（北原（一九八二）…五七頁）というように、「意志」と「推量」を峻別して、助詞モが用いられることによる意味の差異を述べた点も注目される。

北原氏に近い見解を示すのが大野（一九九三）であり、「モ」と「ハ」とを対照した際に、前者のみが疑問詞を承けることから、「モは上に来ている語を、不確定な、仮定の、未定の、非限定的な対象、つまりこれ一つではない対象として取り扱う」（四七頁）と述べる。「後モ」についても、『将来にでも、もしよきたら』と『将来』を仮定する意を表わす。『将来』は、不確実、不確定、未定のもとと扱われ、文末の推量・希望も不確かさを伴う」（五四頁）とする。また、助詞モの史の変遷に関する指摘も示唆に富む。大野氏は、時代を経るにつれて、助詞モのとする文末が「否定・推測・願望など」から「肯定・

確定など」へ推移すると指摘している。

つぎに、『万葉集』の文中の「モ」を整理した、吉田（一九九〇）の分類を参照する。吉田氏は、「ム・マシ」などの助動詞と共起する助詞モを、「意志・願望・命令文内」と「推量・判定要求疑問文内」の二種に配する。前者に関しては、「主体の思い入れが伴う点で仮定とは異なっているけれど」（二三頁）と留保しつつも、この文型に「モ」が用いられる理由を、「実現を期待される事態というものが、可能性を分有する他の事態たちとの並立関係を免れていないから」（二三頁）と説明する。後者に関しても、「推量を含めて蓋然性の表現とは、見解を唯一に絞れないこと、他の可能性を捨てきれないことの表現であり、したがって蓋然的に表現された事態は常に、可能性を分有する他の事態との並立関係を免れることができない」（二四頁）とおおむね同様の見解を示す。

最後に、森野（一九九七・一九九八）は、上代において特徴的に使用される助詞モの文末用法と、「……マデモ」……サエモ」のように現代語訳できる「意外のモ」を関連付ける。さらにそこから「最低・最小限度の対象を『も』がとりたてる用法」（森野（一九九八）…六〇頁）への連続性を指摘する（<sup>20</sup>）。そして、「後モ……ム」や「又モ……ム」といった文型に対しても、「極端な場合のうちの最低・最小限度のモノ・コトをとりたてる『も』と捉えてよいのではあるまいか」（森野（一九九八）…六一頁）とする。

以上のように、助詞モを整理した先行研究からは、「ム」などの助動詞との共起関係が指摘されるものの、その文における助詞モの機能に関しては、見解が一致していない。北原・大野両氏は「もしかしたら」という「不確定・未定」などと説明し、森野氏は「最低・最小限度のとりたて」とするが、いずれにしても、「後にも逢はむ」(一c)のような表現が単純な(並列)・(含蓄)ではないという共通認識は形成されていよう。吉田氏はこの点について詳述していないが、「意志」と「推量」とを区別した上で、前者には「主体の思い入れが伴う」と留保した点には注意しておきたい。

また、助動詞ごとの差異についても、記述は少ない。「意志」と「推量」とが区別されて論じられたり、あるいは、北原(一九八一・一九八二)や森野(一九九八)では上代を対象として、助詞モと共起する個別の助動詞の用例数が示されたりはしているものの、そこから有意義な結論が示されたとは言いがたい。また、中古以降の様相は一層詳らかでない。以上の点に研究の余地が残されているよう。

### 三 助詞モと共起する意志・推量の助動詞

#### 三、一 分析の方法

本稿では、「ケム」・「ケラシ」・「ジ」・「ナリ」・「ベシ」・「ベ

ラナリ」・「マシ」・「マジ」・「マシジ」・「ム」・「ムズ」・「メリ」・「ラシ」・「ラム」を意志・推量に関わる助動詞として定める。なお、「ム」や「ベシ」などは、「意志」・「推量」にはじまり、その意味が多岐にわたると知られているが、本調査では判断の客観性を保持するために、意味の判断は留保し、あくまで文末・節末に右の助動詞が現れるか否かという構文現象に焦点を当てる。

具体的な調査方法としては、まず『日本語歴史コーパス』を対象として助詞モを全て抜き出し<sup>(3)</sup>、つづいて意志・推量の助動詞と共起する例を抽出した<sup>(4)</sup>。以上の操作により、上代から中古にかけて、助詞モと共起する意志・推量の助動詞の量的推移を分析してゆく。

#### 三、二 量的推移

意志・推量の助動詞と助詞モの共起の様相に関して、その量的推移を示す。まず、単純な用例数の整理を表1に示す<sup>(5)</sup>。

表1：助詞モと共起する用例数

	上代	和歌集	中古和文		
	歌	歌	地の文	会話	歌
ケム	11	9	36	34	6
ケラシ	—	1	2	—	—
ジ	19	102	38	60	40
ナリ	—	16	22	32	5
ベシ	14	95	180	164	27
ベラナリ	—	13	—	—	—
マシ	32	74	16	29	17
マジ	—	1	30	32	—
マシジ	5	—	—	—	—
ム	259	193	182	273	64
ムズ	—	—	1	3	—
メリ	—	6	66	75	3
ラシ	2	4	—	—	1
ラム	44	119	42	34	24
計	386	633	615	736	187

ただし、各資料の総語数が異なるため、表1のような単純な用例数からは量的推移を見出したい。そこで、それぞれの意志・推量の助動詞について、総用例数における助詞モと共起する用例数の割合を算出し、表2に示す。小数点以下第三位を四捨五入し、総用例が五例に満たない語に関しては、「—」と示した（これは後掲の表3・表4についても同様である）。

表2：助詞モと共起する割合（％）

	上代	和歌集	中古和文		
	歌	歌	地の文	会話	歌
ケム	9.02	4.86	12.63	13.28	9.52
ケラシ	0.00	9.09	—	—	—
ジ	14.84	33.01	26.57	20.07	37.74
ナリ	0.00	8.99	14.77	10.53	17.24
ベシ	7.33	17.82	19.21	14.92	18.88
ベラナリ	—	28.26	—	—	—
マシ	23.88	18.59	19.05	21.48	20.99
マジ	—	16.67	21.58	22.86	—
マシジ	35.71	—	—	—	—
ム	14.89	14.01	12.05	10.44	18.03
ムズ	—	—	7.14	6.00	—
メリ	—	24.00	19.08	16.16	14.29
ラシ	1.43	6.25	—	—	9.09
ラム	18.03	11.39	18.03	12.83	12.83
計	13.75	15.15	16.00	13.07	18.66

表2より看取される傾向のうち、顕著なものを(三)に整理する。

- (三) a 「ジ」は、上代から中古にかけて「モ」と共起しやすくなる
- b 「ナリ」は上代では「モ」と共起しないが(六〇例)中(〇例)、中古では頻繁に共起する
- c 「ベシ」は、上代から中古にかけて「モ」と共起し

やすくなる

d 「ラシ」は上代においてきわめて「モ」と共起しづらく、中古においても用例が歌に限られるものの、「モ」とはあまり共起しない

e (とくに歌に関して)「ラム」は上代から中古にかけて「モ」とやや共起しづらくなる

個別の助動詞と助詞モの共起傾向については、(三)に示した通りである。これら傾向に共通点を見出すために、まず四、一にて意志・推量の助動詞の「主観性」について確認し、つづく四、二にて、具体的に考察してゆく。

#### 四 〈最小限度〉から〈並列〉・〈含蓄〉へ

##### 四、一 主観性の強弱

三、二の調査結果をふまえ、上代から中古にかけての助詞モの機能の変化について述べる。

結論から述べると、助詞モの用法は上代から中古にかけて、より典型的な「合説」の用法である、〈並列〉・〈含蓄〉に傾いていったものと思われる。そのような意味機能の変化に伴って、共起先の意志・推量の助動詞にも変化が生じ、相対的に主観性の強い助動詞だけでなく、主観性の弱い助動詞にも共

起が拡大したと考えられる。

まず、意志・推量の助動詞の「主観性」について確認する。以下に、意志・推量の助動詞の階層構造を提示した近藤(一九九一)と高山(二〇〇二)を参照する(6)。

近藤(一九九一)は、従属節の従属度の強弱と主観性の強弱が対応することを示し、各種の述語形態をとり得るか否かを調査することで、モダリティの助動詞の主観性を提示した。近藤氏が四一頁に掲げた表は「縦はおよそ助動詞の主観性の強弱によって配置されているものと了解できる(四一頁)とされるので、上から順に(主観性の弱い順)つぎの(四)に示す。なお、私に、とり得る述語形態が似通う助動詞群の境界に「/」を付した。

(四) マジ ベシ / キ ケリ マシ / メリ ナリ /  
ム ラム ケム / ジ / ラシ ベラナリ

つぎに、高山(二〇〇二)の整理も示す。高山氏は、「助動詞の下接」・「従属節内の生起」・「係助詞との関係」から各種助動詞を五段階に分類する。七五頁図2を私に整理して(五)に示す。

(五) a P (プロポジション)  
ツ ヌ ケリ

b M (モダリテイ) 1 (事態性)

ベシ<sub>1</sub> マジ<sub>1</sub>

c M (モダリテイ) 2 (推定性)

メリ 終止ナリ ベシ<sub>2</sub> マジ<sub>2</sub>

d M (モダリテイ) 3 (想定性)

ム ラム ケム ジ<sub>1</sub>

e F (終助詞層)

終助詞 ジ<sub>2</sub> ケリ<sub>2</sub>

(五b~d)のモダリテイの三分類は、「より詞的なものからより辞的なものへ」という、主体的意味が深まる段階(四九頁、圏点は原著者による)とされる。つまり、(五b~d)は後にゆくにつれて、主体的意味が強まるとされる。

近藤(一九九一)と高山(二〇〇二)は、対象とする助動詞こそ若干異なるが、階層構造を提示することにより、意志・推量の助動詞に「主観性の強弱」という観点を提示している。以降では、このような観点に従って、助詞モと意志・推量の助動詞との共起について考えてゆく。

#### 四、二 共起先の変化

(二)で、三、二の調査結果、すなわち個別の助動詞に関する助詞モとの共起傾向に立ち返りたい。中古に至って助詞モ

と共起しやすくなる「ベシ」・「ナリ」は、それぞれ高山(二〇〇二)の規定するM1・M2であり、相対的に主観性の弱い表現である。対照的に、中古に至って助詞モと共起しづらくなる「ラム」は高山(二〇〇二)のM3であり、相対的に主観性の強い表現であった。近藤(一九九一)の整理に照らしても、同様の解釈が可能である。以上より、助詞モと共起する意志・推量の助動詞は、「主観性の強い助動詞」から「主観性の弱い助動詞」へと推移したのではないかと想定できる。つぎに、右のような想定を、より大局的な観点から確認する。まず、(五)に示した高山(二〇〇二)の整理に基づいて、意志・推量の助動詞をつぎのように四種に分類する。

(六) a ベシ・マジ (M1とM2を兼ねる助動詞)

b メリ・終止ナリ (M2の助動詞)

c ム・ラム・ケム (M3の助動詞)

d ジ (M3とFを兼ねる助動詞)

(六a~c)について、総用例数における助詞モと共起する用例数の割合を算出し、助詞モとの共起しやすさの推移を確認する。本稿が「中古和文」とした資料について、一〇〇〇年を境にして前期・後期と分割した上で、文体差を考慮して、まず表3に「歌」のみの調査結果を示し、「中古和文」の「地の文」・「会話」の調査結果は別途表4に示す。

また、(六d)の「ジ」については、すでに(三a)にて例外的な性質が認められたため、別途四、四にて考察をおこなう。

表3：歌における共起割合(%)

	上代	和歌集	中古和文	
	歌	歌	歌	
			前期	後期
(六a)	7.33	17.81	19.05	18.42
(六b)	0.00	10.84	16.67	14.29
(六c)	14.92	12.31	13.41	20.56

表4：地の文・会話における共起割合(%)

	中古和文			
	地の文		会話	
	前期	後期	前期	後期
(六a)	13.97	22.36	15.86	15.80
(六b)	13.50	19.88	11.39	15.71
(六c)	11.52	13.72	9.60	11.86

表3より、(六a)と(六b)が上代から中古にかけて共起の割合を増加させていることが確認できる。しかし一方で、(六c)にはそれほど変化がないこともまた看取できよう。つまり、主観性の強い助動詞から主観性の弱い助動詞という推移を想定するのではなく、主観性の弱い助動詞にも助詞モが結びつく傾向にあった、と理解するべきである。また、中

古前期から中古後期にかけて、「地の文」では助詞モとの共起の割合が(六a)は約八%、(六b)は約六%増加することが表4より看取される。つまり、中古の前後期を比較しても、同様の傾向が認められるのである。

#### 四、三 助詞モの意味

四、二にて、主観性の弱い意志・推量の助動詞にも助詞モが共起するようになるという傾向を確認した。先に結論を示した通り、この傾向は、助詞モの中心的な用法の変化に伴うものであると推される。このことがもつとも顕著に観察されるのが、本稿の冒頭に提起した「後にも逢はむ」の例である。

(一c)の例を(七)として再掲する。

(七) 一瀬には千度障らひ行く水の後にも逢はむ[後毛将相]  
今にあらざとも (万葉・六九九)

このような構文に対して、北原・大野両氏は「もしかしたら、将来にでも」という「不確定」から説明を与え、森野氏は「セメテ…デモ」という「最低・最小限度のとりたて」から説明を与えた。本稿では、意志・推量の助動詞と共起する限りは「最小限度」と解する立場をとりたい<sup>8)</sup>。「最小限度」の用法は、「後にも逢はむ」をはじめとして、(二)に掲



げた「一声も鳴け」のような命令形、その他には、一部の希望表現や、否定・反語表現と共起する際に認められる。また、「ム」以外の意志・推量の助動詞と共起する際にも〈最小限度〉の用法は確認される。

(八) a 玉津島磯の浦廻の砂にもほひて行かな[真名子仁

文尔保比互去名]妹も触れけむ(万葉・一七九九)

b ……我が恋ふる 千重の一重も 慰もる 心もあ

りやと[吾恋 千重之一隔毛 遣遺流 情有毛有八

等]我妹子が 止まず出で見し 軽の市に 我が

立ち聞けば……

(万葉・二〇七)

c 妹が家も継ぎて見ましを[妹之家毛継而見麻思乎]

大和なる大島の嶺に家もあらしを(万葉・九一)

〈最小限度〉は提示する事態の「望ましさ」が小さいことを示す用法であると先に規定した。この用法が「合説」たり得るためには、文として「こうありたい、こうあってほしい」と望んでいなければならない。単に「後にも逢ふ」とある限りは、仮に「後に逢うこと」の望ましさが小さいとしても、それよりも望ましさの大きい事態の成立については何も読み取ることができないのである<sup>9)</sup>。それ故に、(主観性の強い)意志・推量の助動詞、および一部の希望表現や反語表現などととも用いられた時、助詞モは〈最小限度〉と解釈され得

たのである。

それでは、同じような環境に用いられた助詞モは、中古ではどのように解されるべきであろうか。まず、「後(に)」も逢はむ」であるが、『伊勢物語』と『拾遺和歌集』に一例ずつ確認される。〈最小限度〉によって解されるべき用例ではあるが、いずれも『万葉集』収録歌の類歌であるため、中古語の用例と積極的には認めがたい<sup>10)</sup>。

(九) a 玉の緒をあわ緒によりて結べれば絶えてののちも

あはむとぞ思ふ

(伊勢・三五段)

b みな人のかさにぬふてふ有ますげありての後もあ

はんとぞ思

(拾遺・八五八)

もう少し範囲を広げて類似の表現を探すと、つぎのような例が確認される。まず、(一〇)に「後」を含む例を示す。

(一〇) a 功德もつくらずなどしてただよふ。さすがに命は

憂きにもたえず、長らふめれど、後の世も思ふに

かなはずぞあらむかしとぞ、うしろめたきに、頼

むことひとつぞありける

(更級)

b 忘れ草おふる野辺とは見るらめどこはしのぶな

りのちも頼まむ

(伊勢・一〇〇段)

(一〇a)は『更級日記』の最終盤で、菅原孝標女が現世を嘆き、現世にて功德を積まなかったが故に、後世をも憂慮する場面である。「後の世も」の「モ」は「今の世」を〈含蓄〉するに他ならない。つまり、「せて後世は……」という理解にはなり得ないのである。(一〇b)も「今も後も」と解される例である。

また、「後」以外にも同様の傾向が確認される。

(一一)「……今日も日ならば、もろともものしね。今日も明日も、迎へにまゐらむ」など、うたがひもなく言はるるに、いと力なく思ひわづらひぬ。(蜻蛉・中)

(一二)は藤原道綱母が父倫寧に下山を勧められる場面であり、この例も「今日でも明日でも、どちらでも良いから」と明示して〈並列〉しているのである。

以上より、上代における〈最小限度〉の用法が、中古に至って〈並列〉や〈含蓄〉に推移してゆく過程が確認されたであろう(一)。〈最小限度〉が「合説」たり得るためには、「こうありたい、こうあってほしい」というような主観的な表現と共起する必要があったが、〈並列〉や〈含蓄〉が助詞モの中心的な機能となるにつれて、共起する意志・推量の助動詞に「主観性の強さ」が求められなくなったのである。そのように考えることで、三、二や四、二に示したような、相対的に

主観性の弱い表現と結びついてゆく傾向を説明できよう。

#### 四、四 「ラシ」と「ジ」

最後に、例外について考える。本稿では、上代においては主観性の強い表現と結びついていた助詞モが、中古に至って、主観性の弱い表現とも結びつきを強めてゆくと考えた。しかしながら、(三a)に指摘した「ジ」と(三d)に指摘した「ラシ」のふるまいは、そのような結論からは説明しがたい。

第一に「ラシ」について考える。四、一にて参照した近藤(一九九二)では、とり得る述語形態から「ジ」とともに「ラシ」を「モダリティの助動詞の中でも最もその主観性の強さが勝っていると言えるのではないかとひとまず想定できる」(四一頁)とする。しかしながら、「ラシ」は上代においてきわめて助詞モと共起しづらく、ここに説明が要されよう。なお、高山(二〇〇二)の整理は分析対象が中古語であるため、「ラシ」についての言及はない。

「ラシ」は、「何らかの理由によって直接に手にとつて見る」ことのできない事態が、現実(存在しない)過去の客観的現実として動かしがたく存在することを(確言的に)承認する(仁科(一九九八)・四頁)助動詞であるとされる。それ故に、「後にも逢はむ」のような〈最小限度〉の「モ」と共起しがたいのであろう(一)。なお、『万葉集』中の「……モ……ラシ」

の用例を確認すると、いずれも「うつせみも」の形で、昔と今、あるいは自然と人間の〈並列〉・〈含蓄〉に用いられている。

(一三) a 香具山は 畝傍雄雄しと 耳梨と 相争ひき 神

代より かくにあるらし 古も 然にあれこそ

うつせみも 妻を 争ふらしき「虚蟬毛 婦乎

相格良思吉」 (万葉・一三)

b ……あしひきの 山の木末も 春されば 花咲

きにほひ 秋付けば 露霜負ひて 風交じり

黄葉散りけり うつせみも かくのみならし「宇

都勢美母 如是能未奈良之」 紅の 色もうつろ

ひ ぬばたまの 黒髪変はり 朝の笑み 夕変

はらひ…… (万葉・四一六〇)

また、「ラシ」はいわゆる「逆行推論」をなす助動詞であるとの指摘もある(一三)。

(一三) a うちなびく春立ちぬらし「春立奴良志」我が門の柳

の末にうくひす鳴きつ (万葉・一八一九)

b ……玉藻なす か寄りかく寄り なびかひし

夫の命の たたなづく 柔肌すらを 劍大刀

身に副へ寝ねば ぬばたまの 夜床も荒るらむ

「夜床母荒良無」…… (万葉・一九四)

「逆行推論」とは「原因と結果」の「原因」を推論するのであり、(一三b)のような「結果」の推論とは方向が逆である。ここで(一三a)の「春立ちぬらし」に注目したい。「ラシ」によって「春が来たこと」を「原因」と推論する歌は(一三a)を含めて『万葉集』に九首あり、推論の根拠は、「梅の花と百鳥」(八三四)・「桜の花」(二四二二・一八六五)・「うぐひす」(一四四三・一八一九)・「霞」(一八二二・一八一四・一八四四・一八四五)とさまざまである。つまり、「原因と結果」であれば、複数の事態が想定しやすいのは「結果」の方であり、それ故に、「結果」を推論した(一三b)には「含蓄」の「モ」がなじみ、反対に「原因」を推論する「ラシ」には「モ」を用いにくいのではなからうか。もちろん、ひとつの結果に複数の原因を想定することもできなくはないが、稀なことであると考えられる。

第二に「ジ」について考える。「ジ」は一般に「ム」の否定とも解される主観性の強い助動詞であるが、(三a)に示したように中古に至り助詞モとの結びつきを強めるため、本稿の主張に反するようにも思われる。しかしながら、用例を確認してゆくと、やはり助詞モの中心的な用法が〈並列〉・〈含蓄〉へ移行する傾向が認められる。まず、上代の用例を掲げる。

(一四) a 人言の讒しを聞きて玉梓の道にも逢はじと「道毛

不相当」言へりし我妹 (万葉・二八七二)

b 橘のとをの橘八つ代にも我は忘れじ「夜都代尔母  
安礼波和須礼自」この橘を (万葉・四〇五八)

(一四 a・b) はいずれも極端な事態を述べる。前者は詠者にとつて望ましきの小さい「道で逢う」事態を否定することとで、「家で逢う」事態なども否定しており、「最小限度」の用法と解される。後者は助詞モが望ましきの大きい事態を承けるが、否定のスコープの差と捉えれば、「最小限度」の用法と考えられる<sup>(14)</sup>。

つぎに、中古の用例を示す。

(一五) a 大方は月をもめでじ「これぞこの積れば人の老と  
なるもの (古今・八七九)

b いとほしう思へど、「あな痴れ。そこをさへかく  
てやむやうもあらじ」など言ひなぐさむ。  
(蜻蛉・中)

c 「かばかりの御志は今も昔もあらじ」。(類なし)  
とは思ひきこえたまふや」 (落窪・巻一)

(一五 a) は(一四 a)と同様に「最小限度」の用法である。中古に特徴的であるのは、(一五 b)の「……モアラジ」

の文型である。「……モアラジ」は『万葉集』にわずか二例であるのに対し、「和歌集」には三五例、「中古和文」には計四七例(地の文一四例、会話二〇例、歌一三例)が確認される。表1より「……モ……ジ」の用例数を参照できるが、割合としても増加していることが認められよう。また、(一五 c)のように「……モ……モ……ジ」と(並列)する用法は上代には確認されない。

以上より、「……モ……ジ」は共起の割合こそ増加しているものの、「最小限度」の用法はあまり増加せずに、「並列」あるいは「……モアラジ」のような状態的な用例が特徴的に見出せるようになるのである。

## 五 おわりに

以上、助詞モに共起する意志・推量の助動詞に着目することで、上代から中古にかけての助詞モの機能変化について、その一端を論じた。

本稿では、意志・推量の助動詞の総用例数に占める、助詞モと共に起する助動詞の用例数を求めることで、それぞれの助動詞における「助詞モとの共起しやすさ」の変遷を確認した。その結果、上代から中古にかけて助詞モと共に起しやすくなるのは相対的に主観性の弱い意志・推量の助動詞であることを明らかにした。このような推移は、意志・推量文中の「モ」

の中心的な用法が「最小限度」から、「合説」に典型的な（並列・含蓄）へと移行していったことによって説明ができる。

森野（一九九八）は、文末ではたらく、いわゆる「詠嘆のモ」から、「意外」、「最低・最小限度のとりたて」という連続性を想定した。上代において「最小限度」と主観性の強い助動詞が共起しやすい傾向にあったという本稿の調査結果は、森野氏の想定と無関係ではなからう。本稿としても、右のような史の変遷を、「詠嘆」すなわち「非合説」から「合説」へという助詞モの大きな流れの一部に位置づけた。

ただし、残された課題もある。もつとも大きな問題は、上代・中古を通して、助詞モと意志・推量の助動詞が共起する場合に、疑問・反語の表現を伴う傾向が認められることである。さらに言えば、上代における「……モ……ラム」の用例の約二割は、「……モカモ……ラム」となっている。また、「モカモ」は例外なく文末・節末に「ム／ラム／マシ」などの助動詞を要求している。このような現象も含めて、疑問・反語の表現と意志・推量の助動詞の関係性も検討してゆかなければならない。

〔用例出典〕

上代 … 国立国語研究所（二〇一七）『日本語歴史コーパス 奈良時代編1万葉集』（短単位データ10／長単位データ10）

\*私に東歌・防人歌を用例から除いた。

中古和文… 国立国語研究所（二〇一六）『日本語歴史コーパス 平安時代編』（短単位データ11／長単位データ11）

代編（短単位データ11／長単位データ11）

\*『源氏物語』は「桐壺」から「花宴」までを対象とした。

\*『古今和歌集』は、一部「本文種別」を「詞書」から

「歌」へ改めた上で、集計上は「和歌集」に含めた。

和歌集 … 国立国語研究所（二〇一九）『日本語歴史コーパス 和歌集編』（短単位データ10／長単位データ10）

\*『古今和歌集』および『新古今和歌集』は用例から除いた。

〔参考文献〕

井島 正博（二〇一八）「逆行推論について」『成蹊大学文学部紀要』五

三、一九三・二〇七頁

大鹿 薫久（一九九七）「助動詞『らし』について」『語文』六七、二

三・三二頁

大野 晋（一九九三）『係り結びの研究』岩波書店

北原美紗子（一九七〇）「助詞モの意味と用法―源氏物語『夕顔』若紫」

における―『清泉女子大学紀要』（一八）、二四・三六頁

————（一九七二）「土佐日記における助詞モの意味について」『学

習院大学国語国文学会誌』（一五）、八五・九五頁

————（一九八二）「助詞と助動詞のかかりかたについて（その

一）」『清泉女子大学紀要』（二九）、四七・五八頁

—— (一九八二) 「助詞と助動詞のかかりかたについて (その

二) 『清泉女子大学紀要』(三〇)、五三・六七頁

衣畑 智秀 (二〇〇五) 「副助詞ダニの意味と構造とその変化―上代・

中古における―』『日本語文法』(五・一)、一五八・一七五頁

—— (二〇一九) 「上代日本語の否定極性表現―副助詞ダニの意

味再考―澤田治ほか『編』『極性表現の構造・意味・機能』開拓社、

三五六・三七九頁

木下 正俊 (一九八三) 『万葉集全注』(四) 有斐閣

工藤美紗子 (一九六三) 『も』という助詞の意味』『文学』(三二・一二)、

九八・一〇四頁

小島憲之ほか『校注』(一九九五)『新編日本古典文学全集 万葉集』(三)

小学館

近藤 泰弘 (一九九二) 「中古語のモダリティの助動詞の体系」『日本女

子大学紀要 文学部』(四〇)、三九・四九頁

高山 善行 (二〇〇二) 『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房

仁科 明 (一九九八) 「見えないことの顕現と承認―「らし」の叙法

の性格―』『国語学』(一九五)、一・一四頁

野村 剛史 (二〇〇三) 「モダリティ形式の分類」『国語学』(二二二)、

一七・三二頁

松下大三郎 (一九二八) 『改撰標準日本文法』紀元社

森野 崇 (一九九七) 「古代日本語の終助詞『も』の機能」『二松学舎

大学論集』(四〇)、八五・一〇六頁

—— (一九九八) 「奈良時代の係助詞『も』に関する考察」『二松

学舎大学論集』(四二)、四七・六九頁

森山 卓郎 (一九九八) 「例示の副助詞『でも』と文末制約」『日本語科

学』(三)、八六・一〇〇頁

山田 孝雄 (一九三六) 『日本文法学概論』宝文館

吉田 茂晃 (一九九〇) 「万葉集における助詞『も』の文中用法」『島大

国文』(一九)、一五・三三頁

〔注〕

(1) 北原 (一九八一・一九八二) などに詳しい。北原氏の一連の論考では、前提として「も」を係助詞と認定するため、必然的に文末の表現は「結び」ということになる。本稿は、あくまで意志・推量文中に現れる助詞モに着目するという立場をとるため、結果として分析対象が同じであっても、「係り結び」の現象を考察するというわけではない。

(2) 「表現主体にとって許容できる最低限度を『も』がとりたてている」(森野 (一九九八) : 六〇頁) との説明を見るに、話者にとっての「望ましさ」における「最低・最小限度」であると推される。

(3) 稿末の「用例出典」に示したコーパスを対象に検索をおこなった。なお、分析対象を「語彙素・モ」とした都合上、文中の「カモ」や「モゾ」などは計入するが、別の語彙素である「シモ」などは計入していない。また、「トモカクモ」や「誰モ誰モ」のように指示詞・疑問詞を重ねた表現に関しても共起の用例に数えたが、複数の「モ」がひとつの助動詞と共起する場合には、ひとつの共起とみなした。「我が背も我もひとりかも行かむ」(万葉・二七六イ) のような例に関しても同様である。

(4) 助詞モが用いられる節の末尾に意志・推量の助動詞が見れる場合に、助詞モと意志・推量の助動詞の助動詞が共起している、と定義する。

なお、ここにおける「節」は、山田(一九三六)などに定義される「句」におおむね等しいものとする。また、名詞や副詞などに下接する助詞モは、主節と従属節のどちらに含めるかしばしば一様に定めたいが、そのような場合は、一括して主節に含めることとした。

なお、「わびてもあべかめれ」(蜻蛉・下)のように複数の助動詞と「モ」が共起する場合には、それぞれに計入した。

(5) 「中古和文」については、『日本語歴史コーパス』の「本文種別」に従って「地の文」・「会話」・「歌」に分けて用例を示した。なお、「中古和文」における「手紙」、および「和歌集」における「詞書」・「序」については、分析に耐え得る用例数に満たないと判断し、集計からは除いている。

(6) 階層構造によらずとも、「主観性」は意志・推量の助動詞を分類する上で重要な観点である。たとえば、野村(二〇〇三)は、意志・推量の助動詞を「射映(的)」と「超越(的)」とに分類しており、これも概括すれば「主観性」による分類と考えられる。

(7) 『日本語歴史コーパス』の「成立年」に従って分割した。前期には『竹取物語』・『伊勢物語』・『土佐日記』・『大和物語』・『平中物語』・『蜻蛉日記』・『落窪物語』が含まれ、後期には『枕草子』・『源氏物語』・『和泉式部日記』・『紫式部日記』・『堤中納言物語』・『更級日記』・『大鏡』・『讃岐典侍日記』が含まれる。

(8) 「意志・推量の助動詞と共起する限りは」という留保を付したの

は、つぎの用例に配慮したためである。

(I) a 道の辺の草深百合の後もと言ふ「後云」妹が命を我知らめやも  
(万葉・二四六七)

b 白玉の間開けつつ貫ける緒もくくり寄すれば後も合ふもの  
「後相物」  
(万葉・二四四八)

いずれも、「モ」を読添えるため確例ではないものの、「最小限度」とは解しがたい。(I a)の「体よく断る口実に用いた」(『新全集』(二二)・一九五頁)との説明が正鵠を射ており、「望ましき」のスケールの範疇にないように思われる。そうであれば、むしろ森山(一九九八)が説明する「デモ(例示)」などに近い用法であるようにも思われる。

(9) この点は、衣畑(二〇〇五・二〇一九)に詳しい。衣畑氏は、「ダニ」の意味を「述語の表す意味において実現可能性の高い要素を取り立てる」(衣畑(二〇〇五)・一六六頁)として、「実現可能性の高い命題が真であっても、実現可能性の低い命題の真偽は推論されない」(衣畑(二〇一九)・三三三頁)と述べる。本稿が「最小限度」と称した助詞モの用法は、「望ましき」というスケールを想定しているが、「より望ましい要素が実現しにくいため、望ましきはなくてもより実現しやす」と考えられる要素を、「最低限」として取り立てている」(衣畑(二〇〇五)・一六七頁)との説明を見るに、衣畑氏が「ダニ」に対して想定する機能と大きくは異ならないと思われる。

(10) それぞれつぎの歌に対応する。

(II) a 玉の緒を沫緒に搓りて結べらばありて後にも逢はざらめやも  
「在手後二毛不相在目八方」  
(万葉・七六三)

b 皆人の笠に縫ふといふ有間菅ありて後にも逢はむと思ふ

〔在而後尔毛相等會念〕

(万葉・三〇六四)

雲

(万葉・一六〇)

(11) ただし、すでに上代において、〈並列〉・〈含蓄〉の用法は成熟しつつあり、本稿冒頭の(一・a・b)に示したように、意志・推量の助動詞と共に起する助詞モが〈並列〉や〈含蓄〉を表すことも少なからずある。

(12) 北原(一九八二)も、「ラシ」について「事態や状況が目の前にあって、そこから推定する助動詞なので、不確実な不安定さは感じられない」(六〇頁)として、それ故に、『万葉集』の巻一から巻四までに「ラシ」の上に助詞モをとる例が一例のみであることを指摘する。

(13) 井島(二〇一八)を参照した。なお、「逆行推論」の語は用いられないが、大鹿(一九九七)などにも近い見解が示される。

(14) 衣畑(二〇〇五)に詳しい。衣畑氏は、上代から中古にかけて「ダニ」の意味が変化する原理を、否定のスコープから説明する。(III a)が上代語の構造であり、(III b)が中古語の構造である。

(III) a [acc] [与] 夢にだに [与] 見え[ず]

(衣畑(二〇〇五)：一六九頁)

b [与] 夢にだに [acc] [与] 見え[ず]

(衣畑(二〇〇五)：一六九頁)

(一四 b)の例についても、このような変化を想定すれば〈最小限度〉から説明可能である。ただし、上代の助詞モには、(IV)のごとく「スラ」に通じるとされる用法があり、〈最小限度〉との先後関係については詳らかでない。

(IV) 燃ゆる火も「燃火物」取りて包みて袋には入るといはずやも智男

〔付記〕

本稿は、JSPS 科研費 JP21120336 の助成を受けたものである。

(こいけ としき 大学院人文社会系研究科 博士課程一年・

日本学術振興会特別研究員)